変身に求めた救い
――中島敦「山月記」

手塚美里

第一章　研究動向

中島敦の代表作である「山月記」（『文學界』一九四二年二月）は、文学作品としての研究のみならず、国語教材としての研究も進んでおり、多くの分析が試みられてきた。ここでは、本稿の関心に関わる主要な論を取り上げていく。

「山月記」は、「狐憑」「木乃伊」「文字禍」とともに『古譚』として執筆されたが、深田久弥の推薦により「文字禍」とともに二作品のみで『文學界』に発表[1]され、最終的に単独で「山月記」として国語教材に抜擢された。こうした過程を経て、今も多くの人々に読み継がれる中島の代表作であることから、先行研究も「山月記」を中心に扱う論が多い[2]。また、原典が唐の「人虎伝」であるため、原典との比較分析も行われてきた。

このような「山月記」を単独で扱い、原典である「人虎伝」との比較を行う方法に限界を見出したのが佐々木充であった。この比較分析方法では「伝統的な小説理解の方法である「私小説的自我」の論[3]」、つまり、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」に悩む近代人・李徴を著者の中島と重ねる論を繰り返すのみであると主張し、「山月記」を『古譚』の一篇として捉え「本来的な位置に戻し、群の中の「山月記」を一作品として検討」することを試みている[4]。この佐々木論に異議を唱えたのが鷺只雄であった。鷺は、「古い物語」という古代的な衣裳の中に作者は自らの自我を執拗に悩ませた問題を巧みにとりこんで一篇の小説を結構している[5]」ことから、『古譚』は「昔ばなし」ではなく、「私小説」の要素を持っていると主張している。

その後の先行研究では、李徴の内面的特徴に着目した論が多く展開されている[6]。

これまで先行研究では、李徴が虎に変身する展開を悲劇として解釈している論が殆どであり、変身の要因も李徴の自己意識に問題を見出す論ばかりであった。こうした中で、「本文の叙

述から読解して得られる価値（＝意味[7]）（傍点原文）に論点を絞り、当人も知らない間に、救いがもたらされるという、新たな読み方の可能性を問うた昆隆の論がある。しかし、昆論は「《才能の不足》というあり得べき事態、つまり、《半ば》ならぬ、真の《絶望》[8]」を回避することによる、幸福でも不幸でもない「一種の宙釣りの猶予状態」の解除こそが変身がもたらす効果であり、「いわば運命の慈悲」であるとしている。つまり、不幸の完成による救済を見出すのみで、変身を悲劇や不幸の枠から外して、根本的に捉えなおす論はない。

また、李徴に中島を重ねる論も多く存在するが、中島の苦悩や哲学思想との関連性を指摘するにとどまり、それらを活かした作品分析はあまりなされていない[9]。

以上のことから、李徴の変身を悲劇と捉える解釈の枠組みを相対化した作品分析をおこない、中島の哲学的思索も活用することで、「山月記」の変身が救済であることを論じていく。

第二章「山月記」と「人虎伝」の比較考察

ここからは、「山月記」の原典である「人虎伝[10]」との比較から、「山月記」における変身の特徴を考察していきたい。

既に「人虎伝」との比較分析は多くの先行研究で行われているが、この「作品と素材との比較[11]」という操作の必要性について、木村一信は次のように述べている。

> この操作は、『山月記』のように、明確な典拠となった原典をもち、作者がその原典の持つ外的条件の框に拠って作品形象化を行なったことが明らかな場合、やはり一度は確かめておかなければならないものと思われる[12]。

ここでは原典にはない、「山月記」に見られる独自の特徴に着目し考察をおこなう。

第一に、「山月記」の李徴に見られる近代人的要素を明らかにしていく。「人虎伝」、「山月記」ともに、若くして博学である点、自身の才能を自覚し傲慢で、低い官職に甘んずることを良しとしない点が共通している。相違点として挙げられるのは、「人虎伝」の李徴は「皇族の子」であるが、「山月記」では、この部分が削られている点である。この変更に関しては、「彼の、つねに「鬱鬱として楽まず」という心境は、複雑な翳りをもった近代人のそれではなく、高貴な出自をもち、才、人にたけた貴公子の、現実への不満や傲慢さから来るもの[13]」という、濱川の指摘通りである。「人虎伝」の李徴は皇族の子であることから不満を抱いているが、「山月記」の李徴は、人々が憧れる役職に就きながらも満たされず、複雑な近代人の苦悩を抱える青年として描かれている。

また、李徴の詩業に対する考えにも違いが見られる。「人虎伝」の「謝秩に及び測ち退き歸りて間適し、人と通ぜざること

歳餘に近し」にあたる部分が「山月記」では、「いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略に歸臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた」となり、加えて「下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとしたのである」と続く。原典では他者との関わりから遠のくのみである李徴が、「山月記」では現職への限界を感じ、死後百年名を残す詩家を志す人物となっている。

さらに、「山月記」では袁傪との対比により李徴の内面的特徴がより明確になっている。袁傪が虎に遭遇し、李徴であると確信する場面では、「人虎伝」、「山月記」ともに李徴と袁傪が旧知の仲であることが語られ、「山月記」では加えて、「友人の少かつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁傪の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであらう。」という、ふたりの内面的特徴が描かれる。ここには、ふたりの内面的特徴の対比を強調し、李徴の内面的特徴を明確にする狙いがあったと考えられる。

第二に、「山月記」に見られる変身理由の複雑化について見ていきたい。「人虎伝」では、虎になる前、異変が起こる李徴の様子が「汝墳の逆旅の中に於て忽ち疾を被りて發狂し、僕者を鞭捶つ。」となっており、病によって発狂する李徴が描かれる。一方、「山月記」では、「一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に發狂した」となっており、病に罹る部分が削られている。加えて、自身の詩業に半ば絶望し、官吏の職に復帰したことで、高位に進んだ同輩たちの下で働くことによって自尊心を傷つけられた李徴は「怏々として樂しまず、狂悖の性は愈々抑へ難くなつた」とあることから、精神的な要因によって発狂した可能性が高いといえる。

また、「人虎伝」では、「吾れ因つて風に乗じて火を縱ち、一家數人盡く之を焚殺して去る」という行為の因果応報として変身理由が描かれる。しかし、「山月記」では明確な変身理由は描かれず、「何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば、思い當ることが全然ないでもない」と始まる李徴の独白によって、自身の内面的特徴に対する苦悩や葛藤が述べられていく。

第三に、それぞれの語りの違いに注目し、「山月記」に見られる李徴の視点を中心とした語りについて検討していきたい。「人虎伝」では「已にして傪に謂つて曰く、我は李徴なりと」の後に、李徴が袁傪の近況を案じたことから、袁傪の出世報告と、そのことに対する李徴の祝辞が会話形式で書かれる。一方、「山月記」では、この会話が「都の噂、舊友の消息、袁傪が現在の地位、それに對する李徴の祝辭」の一文にまとめられ、会話の主な内容は、李徴の独白形式による、変身理由として思い当ることが中心となっている。「人虎伝」では、李徴の僕者や李徴と密かに交際していた孀婦とその家族、李徴の妻子が描かれるが、「山月記」に描かれるのは妻子のみである。妻子に関して、原典では李徴が妻子の生活を袁傪に託して自身が死んだとふた

りに伝えるよう依頼し、「徵が妻子飢凍を免る」という後日談が描かれるが、「山月記」では李徵が妻子の生活を袁傪に託すまでしか描かれない。

以上のことから「山月記」独自の特徵は、「李徵に見られる近代人的要素」、「変身理由の複雑化」、「李徵の視点を中心とした語り」の三点にあるといえる。

これら「山月記」独自の特徵を踏まえ、次に「山月記」の本文分析をおこない、独自の変身観を考察していく。

はじめに、近代人として書かれる李徵の内面的特徵について考察をおこなう。まず、袁傪と李徵の内面的特徵の対比に注目してみたい。袁傪と李徵がそれぞれ、「温和」と「峻峭」という言葉に加え、「性格」と「性情」によって対比されている。『日本国語大辞典』によると、性格は「その人固有の性向、性質。感じかた、考えかた、行動のしかたなどに現われる、その人特有の性向」[14]であり、性情は「性質と心情」で、「生まれつき」[15]のものと定義されている。このことから、性情は生まれ持った気質のことで、性格は性情によって培われた特有の個性であり、性情の末に成り立つと考えられる。袁傪は様々な経験を通して「温和な性格」を構築したことに対し、李徵は「峻峭な性情」にとどまり、性格への変化がない。そして、「性格」へと変化を遂げなかった「性情」が、後に虎となった李徵の独白によって語られる、李徵の自意識に対する悩みや葛藤にも通じるものになると考えられる。

次に変身要因に関する場面を取り上げ、検討していきたい。

李徵は、人との関わりを避け、詩人として名を残すための努力をせず、役人としても職を全うしなかったのは、すべて臆病な自尊心と尊大な羞恥心によるものであるとしている。

袁傪が人間社会で上手く立ち回るための手段、「温和な性格」を得たのに対し、李徵は生まれ持った「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という性情に縛られ、自分を変えることができず、最終的に人間社会で生きていくことが困難になる。性情を飼いならす手段＝性格を持ち合わせず、人間社会に順応できなかったことが、李徵の変身の内面的要因であるといえる。

では、変身後、李徵にはどのような変化があったのか。変身直後のことを李徵が回想する場面を取り上げ、見ていきたい。

姿が虎になった李徵は、変身という事実に直面し、「直ぐに死を想」うほどに絶望する。しかし、「眼の前を一匹の兎が駈け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消し」、「再び自分の中の人間が目を覺ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばつてゐた」のである。李徵は理性的に死ぬことを望むが、目の前を駆ける兎を見て取った行動は捕食という生きるための本能的な行為であった。虎へと変身した李徵は「一日の中に必ず數時間は、人間の心が還つて來る」と言い、その度に「その人間の心で、虎としての己の殘虐な行のあとを見、己の運命をふりかへる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい」と、虎としての行為を人間として受け入れることに

恐怖を抱いている。しかし、「己の中の人間の心がすつかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだらう。だのに、己の中の人間は、その事を、此の上なく恐しく感じてゐるのだ」（傍点原文）と、恐怖を感じながらも完全に虎として生きることに「しあはせ」を見出している。

人間社会では、社会に人間が順応する必要があるが、性情に悩まされた李徴にはそれができなかった。しかし、虎として自然を生きる李徴は性情に縛られず、「己の中の人間の心」が完全に消えたとき、本能のままに生きることができる。李徴はここに虎として生きる「しあはせ」を見出したのである。

第三章「山月記」と中島敦

ここからは、「山月記」における変身をより詳しく考察するため、中島が遺した創作ノートや書簡の分析から、中島にある哲学思索を明らかにしていく。

「山月記」独自の変身観である、李徴の近代人的要素や複雑化した変身要因からは、自意識や不条理といった中島の哲学思想がうかがえる。こうした中島の哲学思想に関する指摘は、これまで様々な論でなされている。

「山月記」は李徴が自嘲するように「詩人になりそこなって虎になった哀れな男」の物語であるが、それを通して作家が描こうとしたことの第一は――物語の構成に従えば――李徴が虎と化した己の姿を見て茫然とした部分に明らかな如く「存在の不条理性」である。

この「形而上学的不安」は上来ふれても来たし、又後述するように作者にとって久しい問題であった。[16]

加えて、文庫版『中島敦全集3』の「解説」において日野啓三は次のように述べている。

私は中島敦と同じ京城（現ソウル）中学出身の森敦から直接に聞いたことだが、日本の文学者でカフカを読んだのは中島敦が最初だろう、ということだ（もちろん原語で）。それも外国の新しい文学の知識としてではなく、彼自身の問題意識の中で驚きながら身近に読んだはずである。そして森氏は、古代中国の詩人が虎に変身する中島敦の有名な「山月記」という短編には、カフカの『変身』の影響がある、とも言っていたが、それは影響というよりも、個物の確かさを信じられなくなった時代の、同質の感受性のあらわれだろう。[17]

この他に、D・H・ロレンス『息子と恋人たち』の分担翻訳（未完）、パスカル『パンセ』の講読会を持つほか、D・ガーネットの作品、「列子」、「荘子」を愛読しており、アナトール・

フランス全集（英訳本）やカフカディオ・ハーン、ハックスレイ、ゲーテ、「ジャン・クリストフ」、韓非子、王維、高青邱などを読んでいたとされ、哲学的要素のある作品に関心を持っていたと考えられる。中島は、これらの作品に「同質の感受性」を抱き、後に作家活動にも影響を与えたと考えられる。

では、中島自身の問題意識とはどういったものであったのだろうか。ここでは中島が遺した「ノート」、「断片」、「手帳・日記」、「書簡」を基に中島の問題意識を考察していく。[18]

中島は一五歳の時に市販の「創作ノート」に断片や詩を書き始め、そこから度々持病の喘息に苦しめられながらも、南洋庁に赴任するまで精力的に創作活動をおこなっている。東京帝国大学文学部国文科を卒業した後、横浜高等女学校に勤めていたが、喘息の悪化と頻繁な発作により転地を考える。その後、女学校を退職し、パラオの南洋庁へ国語教科書編纂のために赴任することとなる。

僕の病氣は冬に悪いので、いつそ南洋へでも行つたら、と考へてゐたのです。[19]

今度ね、南洋（パラオ）へ行くことになつた、喘息にも、いゝだらうと思ふし、少し遊んで來たくもあり、――たゞ、役人になるのは、少しいやだが、何とか勤まらないこともないだらうと思つてね、[20]

右から順に田中西二、氷上英廣に宛てた南洋行を伝える書簡である。これらの書簡からは、南洋行は悪化する喘息のことを考えたもので、役人として南洋庁に勤めることに抵抗があったことがわかる。南洋に旅立つ直前に父・田人へ宛てた書簡には、南洋庁へ行くことへの悲痛な思いが述べられている。

全く考へれば考へる程、僕は愚かな男です、折角与へられた一年間を思ふ様に使ひもせず、気も進まぬ、無理な仕事に身を任ねるのだから、全く気違沙汰です。実際、何もかも、おしまひになつて了つたやうです、みんな貧乏人根性のさせる業です（こんな下らぬ仕事に就かうとしたのは）恐らく僕の幽霊は、書かれなかつた原稿用紙の間をうろつき廻ることでせう、全く何もかも滅茶苦茶です、こんな事を書いたつて判つて頂かうなどとは、少しも思ひませぬ。決して思つてはをりませぬ、人間がひとりぼつちだなどといふことは今更、判りきつたことです、[21]

ここには、これから就く南洋庁の仕事に対する強い嫌悪感と創作活動ができなくなることに対する苦悩がうかがえる。

中島の問題意識は、幼少期から度々苦しめられてきた持病の喘息によって芽生えた存在の不確かへの不安を原点とした「自身の存在理由」にあったのではないだろうか。

中島は一五歳の時に作成した「創作ノート」をはじめ、問題意識を「ノート」や「断片」、「書簡」などに表現し、作品へと昇華することで、作家になることを志していた。しかし、悪化する喘息によって決めた南洋行により、創作活動ができなくなることに失望し、自分を見失っていく。創作活動は中島にとって、「自身の存在理由」を追求するための重要な行為であったのではないかと考える。

「山月記」でも、この「自身の存在理由」の追求が、中島の哲学的思索によっておこなわれている。

サルトルの『嘔吐』は第二次世界大戦後、「実存主義」という名の下に世界的に広まったが、基本的には同質の存在論的体験を、ほとんど同時期に、中島敦は体験していたのである。[2]

日野が指摘するように、「山月記」にはカフカ『変身』でテーマとして描かれる不条理に加えて、サルトルの実存主義のような要素もみられる。ここで、「山月記」から不条理や実存主義といった哲学的要素を挙げていきたい。

しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。（傍点原文）

ここには、李徴自身の「存在」に対する懐疑がみえる。自身の本質を見出せず不確かな存在のまま生きる、不条理に直面していると言えるだろう。

今迄は、どうして虎などになつたかと怪しんでゐたのに、此の間ひよいと氣が付いて見たら、己はどうして以前、人間だつたのかと考へてゐた。

一體、獸でも人間でも、もとは何か他のものだつたんだらう。初めはそれを憶えてゐるが、次第に忘れて了ひ、初めから今の形のものだつたのだと思ひ込んでゐるのではないか？

不条理に直面した李徴は、「自身の存在理由」の追求を行う中、実存主義的な思考で、生き物の本質の追求をおこなっている。そして、「己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだらう。だのに、己の中の人間は、その事を、此の上なく恐しく感じてゐるのだ」と、虎になることに人間の心で怯えながら、「しあはせ」を確信する。この李徴が自身の「存在」を見つめなおす場面は、「理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」という不確か

な「自身の存在理由」を「詩家としての名を死後百年に遺さうと」することで、自身の本質を追求しようとしている。しかし、「才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰」から「己の有つてゐた僅かばかりの才能を空費して了つた」ことに「虎と成り果てた今、己は漸くそれに氣が付いた」のである。つまり、李徴が自身の本質を追求するためには、詩人に成るのではなく、虎への変身が必要だったのだ。創作活動によって「自身の存在理由」を追求しようとする李徴の姿は、中島と重なるものがある。

そして、今度は中島自身も南洋庁赴任によって、「山月記」の李徴と重なる不条理に悩まされる。

今年の七月以来、おれはオレでなくなつた。本当にさうなんだよ。昔のオレとは、まるで違ふ、ヘンなものになつちまつた。昔の誇も自尊心も、昔の歡びもおしやべりも滑稽さも、笑ひも、今迄勉強してきた色々な修行も、みんな〳〵失くして了つたんだ。ホントにオレはオレでない。お前たちのよく知つてゐる中島敦ぢやない。ヘンな、オカシナ、何時も沈んだ、イヤな野郎になり果てた。（傍点原文）[23]

右に引用した書簡は中島が南洋庁に勤めている際に妻・タカへ送った書簡である。まさに李徴の「自身の存在理由」に対する懐疑を思わせる中島自身の言葉である。

さて、今度旅行して見て、土人の教科書編纂といふ仕事の、無意味さがはつきり判つて來た。土人を幸福にしてやるためには、もつと〳〵大事なことが沢山ある、教科書なんか、末の末の、實に小さなことだ。（中略）昔は、彼等も幸福だつたんだらうがねえ。パンのミ・ヤシ・バナナ・タロ芋は自然にみのり、働かないでも、そういうものさへ喰べていれば良かつたんだ。（傍線引用者）[24]

中島は創作活動と同じように文を綴る教科書編纂の仕事に絶望し、パラオにおける教育の意義を考えている。幼いころから秀才で高い教養を持つ中島が、教育の下で培われる近代人の幸福だけではなく、自然社会における人間の幸福にも目を向けている。この視点は、詩業に絶望した李徴が虎になって経験する生き物を喰らうという、生命が生き抜くための本能的な営み、そして虎としての生における「しあはせ」と重なる。

李徴が詩人になることで本質を追求しようとしたように、中島自身も存在への懐疑を抱き、創作活動を通して「自身の存在理由」を追求しようとした。そして、その手段である創作活動が十分にできない、教科書編纂という仕事に失望しながら、持病の喘息にも苦しみ、不条理といえる状況を生きている。

第四章　「山月記」で描かれた変身

ここまで、悲劇として解釈されてきた「山月記」の変身を救済として捉え直すことを目的として論じてきた。

「山月記」は、中島自身の問題意識が李徴の声に乗せて描かれ、不条理や実存主義といった哲学的要素を含むことで独自の変身観が確立されている。

「山月記」における変身は、不条理な人間社会の枠を超え、自然社会で生きることで自身の本質を見出す究極の救済ともいえる、救いとしての意味があったと考えられる。実際に人間が生きて行く中で、生きづらさを感じたとき、人間社会から抜け出すことは難しく、不条理的状況に陥ってしまうことがある。これは、複雑な家庭環境と持病の喘息に苦しみながら創作活動に打ち込み、作家を志した中島も同様であった。ひとりの人間として、自身の人生に苦悩し、自身の本質を追求した中島は、最終的に作家として「山月記」の執筆を通して、不条理な世界への答えを、変身という救済で示したのである。

注（1）　深田による「四篇のうち二篇だけ載せたのは、あの二篇がすぐれてゐたから」（一九四二年三月三一日付中島敦宛深田久彌書簡）という理由で、「山月記」と「文字禍」の発表が決まった。

（2）　濱川勝彦「「山月記」論――二律背反と逆説の世界――」（『国語国文』一九七一年八月）、昆隆「「山月記」読解」（『日本文学』一九八五年六月）、木村一信「『山月記』論――〈滅び〉への恐れ――」（『日本文学』一九七五年四月）が挙げられる。

（3）　佐々木充「「山月記」――存在の深淵――」（『国語国文研究』一九六五年九月）

（4）　注（3）に同じ

（5）　鷺只雄「中島敦の『古譚』について」（『言語と文芸』一九六七年一月）

（6）　濱川勝彦「「山月記」論――二律背反と逆説の世界――」（『国語国文』一九七一年八月）、木村一信「『山月記』論――〈滅び〉への恐れ――」（『日本文学』一九七五年四月）、蓼沼正美「『山月記』論――自己劇化としての語り――」（『国語国文研究』一九九〇年二月）、前田角藏「自我幻想の裁き――「山月記」論――」（『国語と国文学』一九九三年一〇月）、松村良「エクリチュールの復讐――中島敦『山月記』――」（『昭和文学研究』一九九四年二月）、田中実「〈自閉〉の咆哮――中島敦『山月記』――」（『日本文学』一九九四年二月）などがある。

（7）　昆隆「「山月記」読解」（『日本文学』一九八五年六月）

（8）　注（7）に同じ

（9）　鷺は中島の作品系列における『古譚』の位置及び意義について、「形而上学的不安」をテーマに指摘し、木村一信は、李徴の独白は中島の昭和一二年前後の状態を表現していることや実存的な内面の物語を生み出すべく腐心していたことを指摘している。しかし、中島の哲学思想について詳しい考察はされておらず、検討の余地がある。

(10) 鶴田久作『国訳漢文大成　文学部第十二巻　晉唐小説』（東洋文化協会、一九五五年八月）
(11) 木村一信「『山月記』論――〈滅び〉への恐れ――」（『日本文学』一九七五年四月）
(12) 注（11）に同じ
(13) 濱川勝彦「「山月記」論――二律背反と逆説の世界――」（『国語国文』一九七一年八月）
(14) 『日本国語大辞典〔第2版〕7』（小学館、二〇〇一年六月）
(15) 注（14）に同じ
(16) 注（5）に同じ
(17) 日野啓三「解説」（『中島敦全集3』ちくま文庫、一九九三年五月）
(18) 「山月記」脱稿以前の資料が対象となるが、いつ原稿が執筆されたかは不明。執筆時期について、佐々木充、郡司、濱川が考察を行っているが、一九四一年を超える考察はないため、本稿でも一九四一年以前の資料を対象とする。
(19) 一九四一年五月三一日付田中西二宛中島敦書簡（『中島敦全集3』前掲）
(20) 一九四一年六月四日付氷上英廣宛中島敦書簡（『中島敦全集3』前掲）
(21) 一九四一年六月二八日付中島田人宛中島敦書簡（『中島敦全集3』前掲）
(22) 注（17）に同じ
(23) 一九四一年九月二〇日付中島タカ宛中島敦書簡（『中島敦全集3』前掲）
(24) 一九四一年一一月九日付中島タカ宛中島敦書簡（『中島敦全集3』前掲）

※中島敦「山月記」本文の引用は、『中島敦全集1』（筑摩書房、二〇〇一年一〇月）による。また、先行研究に関して、勝又浩・山内洋編『中島敦『山月記』作品論集』（クレス出版、二〇〇一年一〇月）所収のものは、同書によった。